

今年で開館20周年をむかえます。

クリストファー・ドレッサー  
色絵椿文龍花瓶 (一対) 1886年  
陶器、(高さ)36.5cm  
製作：オールドホール・アーザンウェア・カンパニー



胴に椿の彩色が施され、首には金彩が施された一対の花瓶です。最も目を引くのは、胴体にぐるぐると巻き付いている龍の装飾でしょう。一見すると東洋の陶磁器のように見えますが、これが制作されたのはイギリスでした。

これをデザインしたクリストファー・ドレッサー(一八三四〜一九〇四)は、一九世紀末にイギリスで活躍した装飾美術家です。彼は、金属器、陶磁器、ガラス、テキスタイルなど、日常生活の製品を数多く制作し、いわば今日の工業デザイナーのような活動をしていました。では、どうしてこうした東洋風のデザインが生まれたのでしょうか？

実は、ドレッサーは明治九年に來日しており、日本各地を視察しながら日本の工芸品を調査したことが知られています。膨大な数の日本製品を購入してイギリスへ持ち帰ったドレッサーは、それをもとに日本の陶

磁器の文様や釉薬の研究に没頭し、東洋風のデザインを持つ製品を作りあげました。この陶器でも、高く盛り上げられた龍の浮彫の文様には、明治初期に横浜で輸出用陶磁器の窯を開いた「眞葛焼」で知られる陶工、宮川香山の影響が強く表れています。ドレッサーのこうした活動は、日本の製品やデザインをイギリスに紹介する重要な役割を果たし、その後ヨーロッパ各地に広がる「ジャポニスム」運動の先駆的な役割を果たしたといえるでしょう。

(佐藤 秀彦)

